

多摩支部会報

(2021年 迎春号一通算第41号)

令和3年1月吉日発行

明治大学校友会

東京都多摩支部

支部長 當麻 功

広報委 飯田光宏



迎春

(コロナ感染症に是非打ち勝つて)
永がらへば またこの頃や
しのばれむ
憂しと見し世ぞ
今は悲しき
藤原清輔



支部長挨拶

多摩支部の皆さまへ

當麻 功

(昭39年 商 小平)



明けましておめでとうございます。皆様にはお元気にて新年をお迎えのことと存じます。

日頃は多摩支部・地域支部の運営・活動にご協力いただき誠に有難うございます。

昨年はパンデミックの影響で校友会活動がきわめて困難な一年になり、校友間の交流機会や全ての会合・イベントが中止とならざるを得ず、誠に寂しい年でした。私たちのニューノーマルといわれる日常生活もステイホーム中心となり忍耐を強いられる状態の連続でした。こういう状態は生涯に一度の経験でありましょうから、ここから何かをつかんで明日の生活、活動につなげていきたいものです。ここにこそこの時期に生きる価値を見出していきたいと思えます。皆様もお感じのように、世の中が多様化する中で若手・女性に魅力ある校友会はどうあるべきか提案しながら徐々に実行していきたいと感じております。

大変な状態にあるのは現役の学生たちも同じです。学生たちはその苦しみを跳ね除けるかのように、新年早々からラグビーに、箱根駅伝において苦しい中で日頃の練習の成果を求め最後まであきらめずに戦い、走り続ける勇姿を見せ、但し、結果は予想外でしたが、私たちに感動と勇気を与えてくれました。私たちも感染拡大防止策の継続・徹底で、目の前の困難を封じ込めていきましょう。そのあとは必ずや明るい未来が開けることを期待し信じていきたいと思えます。

今年一年も様々な困難が予測される中、校友の皆様のご理解・ご支援・ご協力をいただきながら共に多摩支部の運営・活動に努めて参る所存ですので、よろしくお願いいたします。

今年が皆さまにとり良い年となることを心よりお祈りいたします。



「創立140周年を迎えて」
理事長・学長 「年頭所感」 (明大広報転載)

柳谷孝 理事長



あけましておめでとうございます。本年は明治法律学校が、岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操の3名の若き創立者によって、1881年1月17日に、当時の麹町区有楽町の一角に開校して、ちょうど140年目となる記念すべき年であります。開校当時の学生数はわずか44人、現在は約3万2000人ですので、まさに隔世の感があります。一方で「権利自由」「独立自治」という建学の精神は清冽な地下水として今日に至るまで脈々と受け継がれてきております。この建学の精神の下に、多様な「個」を磨き、自らの道を切り開いて「前へ」と進んでいくことこそ明大スピリットであります。こうした伝統を守りつつ、次代に向けて進化していきたい。新年に当たりそのように決意を新たにしているところであります。そして今後とも人類と地球環境の調和した未来を創造することに貢献できる有為な人材を広く社会に送り出すべく、教学と法人が一体となって取り組んでいくことで、2021年を大きな飛躍の年にしたいと考えています。

大六野耕作 学長



あけましておめでとうございます。神保町駅近くの学士会館の前に、「東京大学発祥の地」の記念碑が建っているのですが、そこには、明治10年に我が国初の大学が創立された地であることが書いてあります。その官立大学発祥からわずか4年後に、3人の若い法学者が心を込めて作りあげた私立学校が明治大学です。奇しくも創立140年目に当たるこの年に、日本は大きな危機的状況に直面しています。これから先の社会では環境問題や社会的格差などの困難を乗り越えていく知恵が必要になります。困難に正面から立ち向かい、その答えを考え、見つけ、実行に移していく、そのような人材を明治大学は送り出していかなければなりません。近代化、国際化の中で大学を起こした創立者3人の気持ちに似た感覚を覚えているところです。



北野校友会長新年挨拶要旨概要—明大広報記事圧縮

明けましておめでとうございます。昨年は新型コロナ感染症拡大で、全国大会・代議員総会等全国レベルの会合をはじめ支部レベルのものまで一堂に会する行事がことごとく中止となりました。(略) 新型コロナウイルス感染症の問題は医療面での危惧ばかりでなく社会全体の経済の悪影響著しくアルバイト先の喪失等学生への経済的影響も大きな問題であります。

こんな中、明治大学は新たに「明治大学生・教育活動緊急支援資金」を設立し、校友会は積立金から2億円を大学に寄付いたしました。これらの浄財は、緊急学生支援金、印刷環境・通信環境支援、秋学期オンライン授業支援されています。校友会として母校の支援、特に後輩学生への支援ができたことは喜ばしい限りです。そして、今回の校友の皆さんの御心は、お世話になった母校明治大学への「恩返し」とともに、今後社会で活躍を期待する皆さんへの「恩送り」でもあります。コロナの問題が一日も早く収束し、従来の校友会活動が再開し、肩を組み、校歌を歌えることを祈願して、新年のご挨拶とさせていただきます。 **コロナ禍で頑張る明大生にぜひご支援を一広報委**

”無念”140周年を飾れず

明大、完敗認める 田中監督「天理大が全てにおいて強かった」



ラグビー大学選手権準決勝（2日、明大 15-41天理大、秩父宮）明大は、2季前の決勝で22-17と退けた天理大に圧倒された。関東対抗戦1位として臨んだが、関東勢を上回るCTBフィフィタ、ロックのモアララトンガ出身選手たちの突破を食い止められず、自慢のスクラムでも苦戦。田中監督は「一言で言うと完敗。天理大が全てにおいて強かった」と潔く話した。（サンスポweb転載）

無情にもノーサイドを告げるホーンが聖地に鳴り響く。歓喜に湧く漆黒のジャージーを尻目に紫紺の戦士たちは肩を落とした。4年連続の決勝進出を懸けた全国大学選手権・準決勝。相手は一昨年同じ舞台で優勝争いを繰り広げた天理大。開始2分で先制を許すと、その後一度もリードを奪うことはできなかった。東西リーグ戦王者の直接対決は、15-41で西の横綱に軍配。11日に控える国立を前に、箸本組は姿を消した。

ナンバーエイト箸本龍雅主将（商4＝東福岡）インタビュー
——明治での4年間はいかがでしたか。

「自分を成長させてくれた場所でもあるし、同期に恵まれ、この同期で4年間やれたことが一番嬉しいです。明治としてラグビーをやらせてもらえて、人間的に成長させてもらったので感謝の気持ちでいっぱいです」

——ファンの方へのメッセージをお願いします。

「大学界の中でも明治のファンの方の応援が一番大きかったと思いますし、自分たちの力になったと思います。4年間いろいろな人に支えられてここまで頑張ってくれたので、ファンの皆様には感謝しています。個人的には、またこれからどんどん成長して、活躍している姿を見せられるように努力していきたいと思うので、これからも応援よろしくをお願いします。4年間応援ありがとうございました」（明スポweb転載）



↑（撮影 松本かほり氏）

無念！シード権落とす
217.1キロ 襷をつないで26秒差



© 日刊スポーツ新聞社 箱根駅伝の沿道での応援自粛を呼びかけるスタッフ（撮影・山崎安昭）



撮影 沼田光太郎氏

大保海士（法4年 東海大福岡高）区間賞

3日に行われた箱根駅伝の8区で区間賞を獲得したのは明大の大保海士（4年）。区間記録に迫る1時間3分59秒の好タイムだった。

順位を13位から12位に上げた大保は「往路でチーム（14位）がこけてしまったので、自分の区間でシード権に近づけるように走った。本当は往路を走りたかったが、箱根駅伝に自分の名前を刻めてうれしい。過去1番、出来のいいレースができた。後輩には来年以降、強い明治を作っていってほしい」と笑顔で話した。

（読売新聞web）

編集後書

人類未経験の新型コロナウイルス感染症のパンデミック、そんな中で今日のこの日に向けて研鑽を続けてきた選手・関係者の待ちに待った正月を代表スポーツの決戦舞台、天候は快晴、キックオフやスタートのホイッスルや号砲が鳴った。応援自粛の中、校友それぞれが各々の想いを胸に秘めTV観戦応援。

結果は無念の一言!!この屈辱をバネに次回こそは「優勝」を！勇気と感動をありがとう！（広報委員会）



10区 京橋付近 校友：W氏撮影